

明治期及び大正期の唱歌教育について

——幼稚園における唱歌教育の位置づけ——

山下 恭子

On Songs in Meiji era and Taisho era —The Influence of Songs in Kindergarten—

Kyoko YAMASHITA

1. 幼稚園教育の主な制度のながれ

幼児期の教育は人間形成の基礎を培うものとして今日まで重要な位置にある。幼児教育の内容や方法も近代教育制度ができてから今日まで様々な変遷を辿ってきた。幼稚園教育におけるこれまでの経緯を簡単にみることにする。

明治5年近代教育制度として「学制」が公布され、国民すべてが教育を受けることができる画期的なものであった。幼児の教育機関としては「幼稚小学」が規定されたが、この規定において開設されたものはなかった。このころ寺院に開設された幼稚院や小学校に付設された幼稚遊嬉場やキリスト教の影響による董女学院など開設されたが、学制の規定によるものではなく短期間で廃止されたものもあった。当時は小学校開設に重点が置かれ、就学前教育施設にまで及ばなかったという。

明治9年幼稚園第一号として東京女子師範学校（現 お茶の水女子大学）附属幼稚園が開設された。明治6年オーストリアのウィーンで開かれた万国博覧会へわが国がはじめて参加し、大隈重信を総裁、佐野常民を副総裁として見聞したものを「万国博覧会報告書」としてまとめた。その中で佐野常民の「教育普施ノ方案報告書」でドイツ童子園について「遊びを通して遊びを楽しみながら、その過程において内面を開発し、生活の中で自然のうちに知識・技能を体得せる保育はとてもよい。」と説いている。これらのことも幼児教育の開設に作用しているのではないかと考える。

東京女子師範学校附属幼稚園では、当時ヨーロッパで主流だったフレーベル主義の保育を開始した。明治10年には幼稚園規則を制定し、保育科目のほか時間表も定めた。その後、地方にも幼稚園が開設された。早いのは東京女子師範学校附属幼稚園の保母豊田英雄の指導のもと明治12年に鹿児島女子師範学校附属幼稚園が開設された。東京女子師範学校附属幼稚園は、その後も幼稚園教育の核となっていくわけである。

明治32年「幼稚園保育及設備規程」が幼稚園に関する最初の単行法令として出され、保育項目

として「遊嬉、唱歌、談話、手技」が示された。最初に「遊嬉」を位置づけたことは、子どもにとって「遊び」が重要であるというフレーベル主義によるところが大きかったのではないかと考える。今日でも遊びによる直接体験は子どもの様々な面の発達において重要視されていることはいうまでもない。「唱歌」は「遊嬉」の次に位置づけられ、重視されていたとみられる。

大正15年には「幼稚園令」が出され、保育項目は「遊戯、唱歌、観察、談話、手技等」が提示された。

昭和22年には教育基本法及び学校教育法が公布され幼稚園は学校であると明記された。小中学校においては学習指導要領（試案）ができ、幼稚園教育では、それに沿うような「保育要領 幼児教育の手引き」というものが作られた。保育内容はサブタイトル「楽しい幼児の経験」として「1. 見学、2. リズム、3. 休息、4. 自由遊び、5. 音楽……（略）」など11の内容が示された。

昭和31年には「幼稚園教育要領」として出され、保育内容は「健康、社会、自然、言語、音楽リズム、絵画製作」の6領域に分類され、音楽関係のものは「音楽リズム」となった。

昭和39年に「幼稚園教育要領」は改訂され保育内容は6領域のままで、平成元年の改訂で保育内容は「健康、人間関係、環境、言葉、表現」の5領域に編成され、音楽関係「表現」という形となった。

平成10年改訂、そして平成20年改訂と辿っている。また「保育要領」から「幼稚園教育要領」へ、内容も「保育項目」から「保育内容」という文言に変わっている。

さて、明治期や大正期には音楽に関わる保育項目（昭和22年以降保育内容）は唱歌と呼ばれていたわけであるが、その唱歌の位置づけや内容を考察してみることにした。

2. 幼稚園の創設と唱歌

明治5年「学制」の公布により近代教育制度が発足し、前述のように幼児の教育機関として「幼稚小学」が規定されたが開設はされなかった。明治9年わが国第一号の幼稚園として、東京女子師範学校（現 お茶の水女子大学）附属幼稚園が創設され、フレーベルの幼稚園を模範として保育を開始した。保育目的には知的な面、身体的な面、情緒的な面、社会的な面に慣れさせることとしている。保育科目として「1. 物品科 2. 美麗科 3. 知識科」の3つに大きく分けられ、これには25の細目が含まれていた。その中に「唱歌」は位置づけられ、規則制定前は毎日唱歌教育がなされていたが、制定後は時間表のもと毎週木曜日に「室内会集」の後30分間の唱歌教育がなされていた。

さて、創設期の中の保育内容で注目すべきものは「唱歌」である。保姆第一号の豊田英雄らは子ども向けの「唱歌」を作るのに努力をした。歌詞については外国の歌詞を訳したり、豊田や同じ保姆の近藤濱らが自分たちで詩を詠んだり、日本の古歌から採用したりした。作曲は宮内省式部寮雅楽課の伶人に委嘱し、明治10年に「保育唱歌」詳しくは「保育並びに遊戯唱歌」が作られた。これらは雅楽の記譜法である墨譜であり、伶人たちの作曲であるため曲調は雅楽の伝統によ

っていた。この「保育唱歌」は雅楽家や保育関係者によって書き写され、出版はされなかった。これらの唱歌は、笏拍子で拍子を取り和琴の伴奏にのせて歌うという形がとられていた。遊戯とともに唱歌も重要視された。これは遊戯唱歌として行うことが効果的であるとされていたためである。

豊田英雄は唱歌教授について「唱歌ヲ授クルハ成ヘク普通の歌ヲ以テ為スヘシ何トナラハ人ノ能ク知ル所ノ事ナレハ子女帰宅ノ後迄之ヲ復習スル事ヲ得又子女ノ歌ヲ作ル時ハ師タル者之ヲ助ケテ歌ヲ綴リ使ハス可シ」⁽⁴⁾と述べている。また豊田は幼稚園の実際の手引書としての手記「保育の栞」の中で「唱歌はなるべく歌詞が理解し易く、抑揚が簡易な歌を歌わせるべきである。大人にとって面白い歌でも、子どもは大人のようにではない。拍子は四拍子で、曲が活発なるものを書くべきである。」と述べている。豊田の唱歌の教授法と手記は、豊田が自らの保育体験から子どもの姿を深く理解した保育論と思える。

ここに「保育唱歌」の中の中村道子氏による採譜「家鳩」の唱歌（譜例1）と明治10年ころの「家鳩」による遊戯の実際を図1と図2で紹介する。この唱歌は、フレーベルの「母の歌と愛撫の歌」の中の「鴿舎の歌」の翻訳を豊田が歌いやすいように歌詞を直したものである。



譜例1 「家鳩」（中村道子氏 採譜，幼稚園百年史より引用）

歌詞は五・七調で整えられている。子どもたちはこの歌をうたいながら図1のような遊戯をしていた。手と手をつなぎ輪となることで鳩小屋を表し、輪の中や外の数人は鳩を表していると思われる。教師は子どもと一緒に遊戯することの大切さもよく伝えている。図1で洋服の保姆はフレーベル主義の教育を受けて来日した松野クララ、右の和服の保姆は豊田英雄、下の和服の保姆は近藤濱といわれている。また洋服を着ている子どもたちが数人見られ、富裕層の子どもたちが幼稚園教育を受けていたことがわかる。



図1 明治10年ころの「家鳩」の遊戯（幼稚園百年史より引用）

一方、文部省は「鴿舎の歌」を「音楽体操の事」のなかでも取り上げている。体操は健康のために幼児には欠かすことができないことや、英国でもフレーベル式の体操を幼稚園で実践していることなどを挙げ、体操するときは適宜歌を入れるとよいとしている。これは体操する手段として音楽を用いたのであろうか。これも円形を作り（図2）、体操図の第六（図3）のように、腕を伸ばし鴿の形にして、動かしながら奔走する。そうすると体全体の筋肉を使用できると説明している。図1の場合と形態は同じである。これもフレーベルの「母の歌と愛撫の歌」の中の「鴿舎の歌」の中で、示されていた形態ではなかったろうかと推測する。



図2（明治保育文献集 第一集より引用）

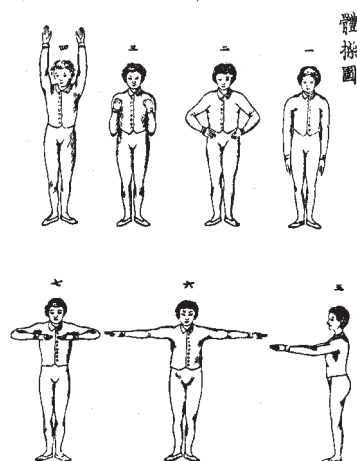


図3（明治保育文献集 第一集より引用）

遊戯唱歌はすでに明治7年伊沢修二が愛知師範学校長のころ、幼稚園風の施設を設けて試みている。どうして伊沢が早く遊戯唱歌を取り入れたかについて、「幼児の教育第一巻」の「幼児に課する唱歌遊戯の話」の手記の中で、「明治七年ごろはまだ幼稚園はなかったが、そのころから唱歌

遊戯を起こす必要性を感じていた。フルベッキ氏から教育書を借りて読み、フレーベル氏という大教育家は子どもに唱歌遊戯を教え、子どもの活動性を養っている。そこで愛知師範学校長として、文部省へ建議した。」と述べている。伊沢が文部省にあてた「将来學術進歩に付須要の件」をみると「唱歌はとても有益である。知覚神経を活発にして、精神を快樂にする。人の心に感動を与える。発音を正しくして、呼吸を整える。幼児教育上欠くことはできない。」と述べている。また「椿」、「胡蝶」、「鼠」の唱歌と遊戯の方法まで紹介している。「椿」の例を挙げてみたい。⁽²⁾

椿（唱歌）

椿や椿 椿の花が開いた、中の心まで開いた、椿の花は萎む時もあらうが、
開けた御代は八千歳の春までも萎む時はあらじ。

技態

此戯は群児五分の一を椿の心として中央に蹲まらしめ相互に手と手を連ね合ひ肩摩団結せしむ、他の児も亦、此の如くして花心の外圓を回繞す、花心の児、同声に、椿や椿と音頭を揚れば衆児之に次で亦同じ句を唱ふ、椿の花が開いたと謡ふ時、衆児和唱しながら起つて、一大圓隊を為す、萎む時も云々と謡ふ時、先の如く蜜合一す、開けた云々謡ひながら大小圓の形をなし謡ひ終われば一拝して止む。

これら「椿」、「胡蝶」、「鼠」の三曲はどれでも手をつなぎ輪になる形をとっており、「家鳩」の遊戯の形とほぼ同じである。その他の遊戯唱歌をみると当時の遊戯唱歌は手をつなぎ円形を作り歌いながらまわるという形態がとられていたようである。今日でもこの形態はよく使われるものであり、単に手と手をつなぐだけのものでなく、そこには友だち同士の絆という点からも考えたところである。

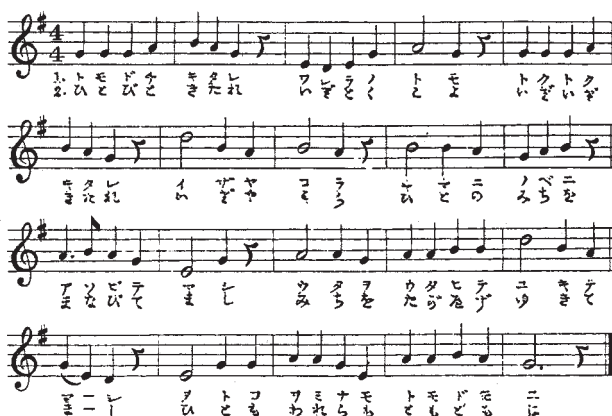
明治20年には伊沢が音楽取調掛の協力のもと、これまでよりも一層幼児向きの唱歌「幼稚園唱歌集」が文部省より出版された。この緒言を紹介する。⁽³⁾

- 一 本編ハ、児童ノ、始メテ幼稚園ニ入り、他人ト交遊スルコトヲ習フニ当リテ、遊嬉唱和ノ際、自ラ幼徳ヲ涵養シ、幼智ヲ開発センガ為ニ、用フベキ歌曲ヲ纂輯シタルモノナリ。
- 一 唱歌ハ、自然幼稚ノ性情ヲ養ヒ、其発声ノ節度ニ慣レシムルヲ要スルモノナレバ、殊ニ幼稚園ニ欠ク可ラズ。諸種ノ園戯ノ如キモ、亦音楽ノ力ヲ仮ルニ非ラザレバ、十分ノ効ヲ奏スルコト能ハザルモノナリ。
- 一 幼稚園ノ唱歌ハ、殊ニ拍子ト調子トニ注意セザル可ラズ。拍子ノ、緩徐ニ失スルトキハ、活発爽快ノ精神ヲ損シ、調子ノ高低、其度ヲ失スルトキハ、音ニ音声ヲ、幼害スルノミナラズ、幼稚ノ性情ニ厭悪ヲ醸シ、其開暢ヲ妨グル恐レアリ。故ニ本編ノ歌曲ハ、其撰定ニアタリ、特ニ此等ノ要旨ニ注意セリ。
- 一 幼稚園ニ、箏、胡弓、若シクハ洋琴、風琴、ノ如キ、楽器ヲ備ヘテ幼稚ノ唱歌ニ協奏スルヲ要ス。其レ楽器ニヨリテ、唱和ノ勢力ヲ増シ、深ク幼心ヲ感動セシムルノ力アルヲ以テナリ。

この緒言で唱歌は子どもの性質と心情を温和にし、遊戯する時は音楽と一緒に入れると効果が得られる。また歌うときは楽器の伴奏を入れると、子どもの歌う力が増し、感動を与えるとした点に注目したい。明治10年にできた「保育唱歌」では前述したように、和琴の伴奏ということがかかれており、「幼稚園唱歌集」においては箏、胡弓、洋琴、風琴など豊かな音が出る楽器が示されており、子どもに豊かな音色が耳から入ったのではないかと考える。確かに伴奏を入れて歌った場合は生き生きと歌えることが多い。「感動」ということばは、今日の音楽教育でも大切なことばであり、生活の中でも今日の教育で示されている「生きる力」の一つになりうる言葉でもある。

次に「幼稚園唱歌集」より「第七 友どち」と「第八 子供子供」を譜例2と譜例3で紹介する。

第七 友どち



譜例2 「友どち」(東京芸術大学百年史より引用)

第八 子供子供



譜例3 「子供子供」(東京芸術大学百年史より引用)

「幼稚園唱歌集」の全29曲について調べてみた。拍子は四分の二拍子と四分の四拍子が22曲、八分の六拍子が5曲その他八分の四拍子などとなっている。調子はへ長調とト長調が21曲その他変ホ長調やニ長調となっている。リズムは基本的な七つうち「♪♪♪ | ♪♪♪ ♪ |」でできているも

のが多く、とてもシンプルである。旋律線はなだらかな順次進行をとっており、跳躍進行もあるが極端な跳躍ではない。音域は8度内で収まっているものが多く見られるが、中には二点ホや二点への音が出てくる曲があり、子どもには無理ではないかと思われるのも数曲みられる。譜例2で取り上げた「友どち」は当時のスタイルがよく窺える。また「第八 子供子供」は八小節目から十一小節目がこの曲を楽しんでいる。♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ | ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ | の軽やかなリズムと「エンヤラホホ」の歌詞が繰り返され、子どもが楽しんで歌ったのではないかと想像される。この唱歌集には伊沢修二が携わった関係もあり、「蝶々」や「霞か雲か」など「小学唱歌」から採られたものも見受けられる。

明治32年には「幼稚園保育及設備規程」が初めて文部省令第32号として制定された。保育項目は「遊嬉、唱歌、談話、手技」の4つで、最初に遊嬉をもってきているのは、幼児教育において直接体験の遊びの大切さを強調していると考ええる。遊嬉には、自由遊びの随意遊嬉と歌にあわせて共同で行う共同遊嬉にわけられた。第2番目に「唱歌」を位置づけたことも注目するところである。「幼稚園保育及設備規程」における唱歌について「唱歌ハ平易ナル歌曲ヲ歌ハシメ聴器、発声器及呼吸器ヲ練習シテ其發育ヲ助ケ心情ヲ快活純美ナラシメ徳性涵養ノ資トス」⁽⁴⁾と述べられている。これは明治11年伊沢修二が目賀田種太郎とともに文部大輔田中不二麿に送った「音楽取調の事業を着手すべき見込書」の中で「現時歐米ノ教育者……（略）夫れ音楽ハ學童ノ神氣ヲ爽快ニシテ……（略）肺臟ヲ強クシテ其ノ健全ヲ助ケ、音聲ヲ清クシ、發音ヲ正シ、聴力ヲ疾クシ、考思ヲ蜜ニシ又心情ヲ樂マシメ其ノ善性ヲ感發セシム……（略）」⁽⁵⁾と述べていることを見ると、明治32年のこの保育項目の唱歌については伊沢修二らのこの見込書が元となっているのではないかと推測するところである。

大正15年「幼稚園令施行規則」が出され、保育項目を「遊戲、唱歌、觀察、談話、手技等」とした。「唱歌」は子どもにわかりやすく、遊戲を伴う曲として「お手手つないで」「どんぐり」「からす」「ゆうやけこやけ」などが歌われた。今日でも歌い継がれている。この大正期には「大正幼年唱歌」が幼稚園や小学低学年の副教材として民間から出されている。

3. 普及時における他の幼稚園の唱歌教育状況

東京女子師範学校附属幼稚園のほか、地方の幼稚園では保育の中でどのような唱歌教育が行われていたかを探ることとした。

1) 鹿児島女子師範学校附属幼稚園（明治12年）

保育科目として「堂生式」「摘美式」「修学式」を定め、その中に28の細目が含まれている。朝お集まりのとき20分間「唱歌」と自由遊戲の前30分間「唱歌」が織紙法や繡紙法などと一緒に毎日教育がなされていた。これは東京女子師範学校附属幼稚園の指導を受けたため内容はほとんど同じである。

2) 愛珠幼稚園（明治13年）

保育科目は20遊嬉のほか「球遊、唱歌、音楽、説話」などがあり、「唱歌」と「音楽」を区別してあるが、どのようなものであったか興味深いところである。また「唱歌音楽体操」として自由遊びの前に毎日30分間教育がなされていた。明治26年の保育規程では「唱歌ハ聴音ト発声機トヲ練習シ兼テ健康ヲ補ヒ徳性ヲ涵養スルヲ旨トス」としている。

3) 大阪市の幼稚園規則（明治22年）

保育科目は「修身話、書き方、読み方、唱歌、遊嬉」など20科目を設定している。やはり「唱歌」も位置づけられた。

4) 女子高等師範学校附属幼稚園分室（明治25年）

生計上、中級下級の住民の子どもを対象とした幼稚園であり、保育科目は「説話、行儀……(略)唱歌、遊戯、読書き」など12科目であった。「唱歌」については「常に楽器を用いしないで、口頭で歌を教え、発音などを正しくする。日本の旋律でできている歌は子どもにとって歌い易く適している。子どもの気持ちを和らげ、静粛にする効果があり、多くの曲を選ぶ。」と述べられている。唱歌の時数も多く、外遊びのあと毎日30分間の唱歌教育がなされていた。

5) 若松幼稚園（明治26年）

保育科目は「会集、恩物、遊戯、唱歌」など16科目。「唱歌」は土曜日を除き毎日30分間の教育がなされていた。

6) 豊浦幼稚園（明治31年）

保育科目は「庶物話、遊戯、積木、唱歌」など18科目。「唱歌」は毎日30分間行われていた。特徴的なのは降園前に「整姿」が10分間行われており、十分に落ち着かせてから帰るという意図があったのではないかと察する。

7) 明石女子師範学校附属幼稚園（明治37年）

この幼稚園では保育事項ということばを用い「会集、園芸、……(略)手技、唱歌、観察、整理」など9事項が示された。「唱歌」については「唱歌は幼児の心情を快活にし、徳性の涵養の面でもよく、各器官を自然に発達させ助長させる。」と述べている。また、唱歌の選択について、「歌詞は談話体で理解しやすいもの、同一の音や言語が反復されるもの。歌詞の内容について、幼児の思想の範囲内で興味をひくもの。歌曲は音域が狭く、高低の変化があまりないもの、旋律が繰り返されるもの、半音が少ないもの、拍子は四分の四拍子か四分の二拍子のもの。」と述べている。

以上の七つ幼稚園の例をみてもわかるように「遊戯」「唱歌」などは、どの幼稚園でも実践されており、子どもにとっては必要な内容であると認識されていたことがわかる。

4. 考 察

明治期と大正期に保育のなかで「唱歌」あるいは「遊戯唱歌」が実践されたことは、今日の音楽教育に大きな影響を与えている。また「唱歌教育」に尽力した伊沢修二や豊田英雄らの名前は忘れることができない。

豊田英雄らが中心となって作られた「保育唱歌」の曲目は大変多く100曲もあり、豊田らがいかに努力したかがわかる。前述したように歌詞はフレーベル主義幼稚園教育書を翻訳したもの、万葉集、古今和歌集、古事記などから採られたもののほか、豊田英雄や近藤濱らによるものが見られる。この唱歌の分類としては保育のための歌、遊戯唱歌、四季や景色を歌ったもの、修身や徳性の涵養のための歌、勧学のための歌など幅広い曲が載せられている。

「幼稚園唱歌集」の曲は29曲あるが保育唱歌から採られたものも見受けられる。この唱歌集にも保育唱歌と同じように遊戯唱歌、修身や徳育のための歌、自然をうたった歌等が載せられている。

さて、当時はやはり修身や徳育教育は重要なものであったため、唱歌にも修身や徳育の内容が歌詞に現れることは当然のことである。しかし日清・日露戦争があったにもかかわらず、「保育唱歌」や「幼稚園唱歌集」には戦争に関した歌が出てきていない。このことは子どもの心身の発達を考えた場合、やはり戦争の歌は適切でないと判断したのだろうか。幼児期より精神を過度に刺激することへの配慮であるのではないかと評価するところである。

大正10年岡山市立幼稚園の保育事項の中で、唱歌遊戯の材料は野卑なものは避けて、高雅なものを選択する必要性を挙げている。このことも子どもの心情面を重視したものと評価できる。幼児期から唱歌教育がなされ、当時の幼稚園の唱歌教育は「こころの教育」、「美しさを求める教育」それに加えて「呼吸器の発達」に言及しているのが見られ、唱歌教育の効果が今と違うように理解されていた部分も見逃せない。「感動するところ」「さわやかな気持ち」など明治期からずっと今日の教育でも変わっていない部分は先人たちの残してくれたものである。大人たちは幼児の健全なる成長をいつも願って幼児教育を行ってきた姿が「唱歌」を通して窺えた。伴奏を伴って歌う唱歌や遊戯を伴う唱歌は今も昔もかわらず子どもにとって楽しかったにちがいない。

引用文献

- (1) 文部省「幼稚園教育百年史」昭和54年（ひかりのくに株式会社）61頁
- (2) 幼児の教育復刻刊行会「復刻 幼児の教育 第一巻」昭和54年（名著刊行会）63頁
- (3) <http://www.geocities.jp/saitohmoto/hobby.music/nurseryfiles/nursery.html>
- (4) 文部省「幼稚園教育百年史」昭和54年（ひかりのくに株式会社）505頁
- (5) 東京音楽学校 編「東京芸術大学百年史」昭和62年（音楽之友社）14頁

参考文献

- (1) 文部省『幼稚園教育百年史』（ひかりのくに株式会社、昭和54年）

- (2) 東京音楽学校 編『東京芸術大学百年史』（音楽之友社，昭和62年）
- (3) 幼児の教育復刻刊行会『復刻 幼児の教育 第一巻』（名著刊行会，昭和54年）
- (4) <http://www.geocities.jp/saitohmoto/hobby.music/nurseryfiles/nursery.html>
- (5) TeaPot-Ochanomizu University Web Library-Institutional Repository

これは平成21年10月17日「九州公私立大学音楽学会 長崎大会」で口頭発表したものに加筆修正したものである。